

オックスフォード・ユニオンと大学の ディベート組織におけるエスノグラフィー 調査：世界のリーダーを輩出するシステム

中 谷 安 男

1 はじめに

オックスフォード大学は、英国のリーダーを養成する機関として広く認識されている（Catto, Aston, & Evans, 1984; Brock & Curthoys, 1997; Walter, 1984）。歴代の首相としてグラッドストンを始め28人を輩出している。近年も、サッチャー、ブレア、キャメロン、メイ、ジョンソン等、この大学の出身者の首相が多い。また英国に限らず、パキスタンのブット元首相、ミャンマーのアウンサンスーチー政治指導者、カナダのアボット元首相、オーストラリアのフレーザー元首相など世界のリーダーも育てている。もちろん、このような政治家だけでなく、日本の山中教授と共同でノーベル生理学・医学賞を授賞したガードン博士など、55人がノーベル賞を受賞している（Russell & Wyland, 2001）。

これまで、なぜこのようなグローバル規模で活躍できる人材の卒業生が多くいるのか考察した調査は少なくない（ジョイス, 2018; 橘, 2018; 刈谷, 2017）。これら多くの著述は、独特のカレッジのシステムや、少人数で行うチュートリアルなどの伝統に基づいた教育システムの利点を述べている（船守, 2009; 刈谷・吉見, 2020）。もちろんこれらの報告は多くの示唆を含んでおり、この大学のシステムの優位性を理解するのに役立つ（中谷,

2004)。しかしながら、実社会で活躍するためのリーダーシップは、単に学業では身に付かない部分も多い（金井・野田，2007）。

Kotter（1999）が述べているように、優れたリーダーになるのは、ビジョンと戦略を作り、その遂行に向けフォロワーを結集し、権限を与え、障害を乗り越え、実践する力が必要である。このためには課題を共有し、戦略や指針に賛同させ、行動を起こしてもらうためのコミュニケーション戦略が必須となる（Nakatani, 2015, 2016, 2017）。しかしながら、このようなコミュニケーション能力を、前述のリーダーたちは、大学で学んだのか、それとも後天的に実務に関わりながら身に付けて行ったのか、明確に報告した研究は少ない。

以上の点から、本論はオックスフォード大学にある、世界有数のディベート組織であるオックスフォード・ユニオン（Oxford Union: OU）などに注目し、学生のコミュニケーション戦略の発達の要件について検証する。OUは、学生によるディベートを目的として1823年に設立された。学期中に行われるフォーマル・ディベートは学生だけでなく、第一線で活躍する、政治家、実業家などを招いて行われる（中谷，2020）。中でも1933年に実施された「国王と国家のため」のディベート結果が、ヒトラーのヨーロッパ侵攻を決意させたという伝説がある（Ceadel, 1979; Hughes & Phillips, 2000）。このように注目度も高い場において、実践的なディベートを行うためには、学生といえども、高度なコミュニケーション能力が必要となる。これまでOUに関する研究は少なくない（Graham, 1988; Walter, 1984）。本論はこれらの議論を踏まえた上で、エスノグラフィー調査を行った結果を報告する。この際、OUや他のディベート団体に、筆者自身がメンバーとなり収集したデータの分析を行う。具体的には、大学にどのようなコミュニケーション戦略を育てるシステムがあり、それらがどのように運営されているのか詳細に確認していく。

2 背景：オックスフォード・ユニオンの概略

ここでは、先行研究や公刊の資料を基に、本論で検証するOUがどのようなイベントを主催しているのか概観する。また、そのためにいかなる組織で運営されているのか報告する。さらに、OUは大学とは独立した組織であり、そこでの学生の活動に対してカレッジの教授陣はどのように考えているのか確認する。

前述したようにOUは、当初学生同士のディベートを実施するために1823年に設立され、既に200年近くの歴史を持つ。オックスフォード大学は1年間を、10月から始まる（Michaelmas）、1月からの（Hilary）、4月からの（Trinity）の3つの学期（Term）に分けている。それぞれは8週間の短期集中となっている。OUでは、学期中にほぼ毎週木曜日に行われるメイン・ディベートが中心の活動となる。しかし、その他のイベントも時代と共に加えられ発展してきている。ここでは、筆者が2回目に在籍した2019年4月から2020年の6月に渡る4学期間に集めたデータを基に説明していく。尚、2020年のトリニティ学期はCOVID-19の影響で、すべての行事がWEBに基づいたものとなった。

2.1 主なイベント

後で主要なイベントに関しては詳細な検証を行うが、ここでは、学期中に行われるものを大まかに確認する。

OUのメンバーの資格は、大学の学生や関係者なら275ポンドほどの登録料を払えば取得できる。メンバーになればTerm Cardに記載された各学期のイベントに自由に参加できる。付表に2020年のトリニティ学期のTerm Cardの例を一部掲載している。

主な行事として前述のディベート以外に、スペシャル・イベントとして複数のスピーカーが討論を行うパネルというものがある。これはゲストスピーカーが2人から5人招かれ、特定のテーマについてディスカッション

をする。例えば、2020年のヒラリーの3月11日には、中国のウイグル問題を議論した The Uyghur People: Voice of the Forgotten というパネルが行われた。ウイグルの自由を訴える The World Uyghur Congress の代表者である Dolkun Isa、天安門事件の反対派のリーダー Wuerkaixi、英国で活躍するウイグル人歌手 Rahima Mahmut が招聘された。中国政府やマスコミが発表しないような生の現状報告も、それぞれの立場から行われた。その後、聴衆との質疑応答が行われた。

またOUの他の重要なイベントとしてゲストスピーカーがある。これは、政治、経済、アカデミック、芸術などの第一線で活躍するスピーカーが招聘される行事である。例として、筆者が参加したものに、MeToo Movement 設立者の Tarana Burke、ネパール首相 Khadra Prasad Oil、コカ・コーラ CEO の James Quincey や、歌手の Billy Joel などがある。スピーチ形式やOUのプレジデントとのインタビューの後、一般参加者との質疑応答がある。

さらにソーシャル・イベントは純粹にメンバーの交流を深めるもので、クイズやフォーマル・パーティー、ジャズパーティーなどもある。

これら以外にメンバーの特典として、無料のディベートのワークショップに参加できる。将来活躍できるディベーターを目指す人の支援が目的で、ほぼ毎週に初級、中級、上級の3グループのトレーニングの機会がある。

2.2 組織

OUでは第ゼロ週 (0th week) と呼ばれる学期前の1週間と、学期中の8週間の合計9週間において、前節で報告したイベントが合計50ほど行われる。土日はほとんど活動がなく、学期の平日に、多い日で2つのイベントが開催される。平日の日中はチュータリングや講義があるため、たいていのイベントは夕方5時以降に始まる。例えば、木曜日の5時にゲストスピーカーの講演があり、8時30分からディベートがあるという具合である。忙しい学業の中で、50ものイベントをこなすには、確固たる組織運営と学

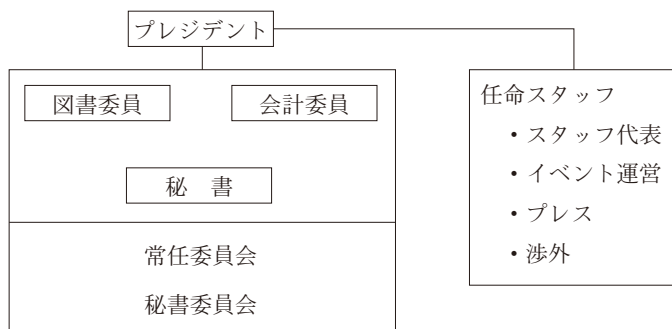
生同士の密な協力が必要である。

多忙なOUの行事を企画し運営するのは、学生中心の The Oxford Union Committeeである。図1に組織図を示している。

この委員会の代表はプレジデント（President）で、イベントの運営を統括し、すべての活動に関する決定権を持つ。プレジデントを支える主な役職として図書委員（Librarian）、会計委員（Treasure）があり、この2名はディベートにおいて、正面中央に座するプレジデントの両脇に座る。これら3名と共に、議場のデスクに座りディベートなどの発言記録を取る秘書（Secretary）の役職がある。OUメンバーによって選出された、以上の主要4名はディベートでは花形である。観衆の大きな拍手と共に、著名人を含むディベートの討議者を先導して議場に入場する。慣例として、プレジデントになる前に図書委員、会計委員、秘書の要職を務める学生が多い。

これら4名の主要メンバーの下でイベント企画や運営するのは、7名ほどの常任委員会（Standing Committee）の構成員である。彼らも同様にOUメンバーの選挙で選ばれる。この選挙で選ばれた計11名が中心となり定例会議が開催される。会議において、主要4メンバーの下でイベント全体の運営方針が定められる。

図1 OUの組織図



さらに下位組織の実働部隊として秘書委員会 (Secretary's Committee) があり、11名ほどで構成されている。彼らは、イベントが行われる際の会場の設営準備や、ゲストや聴衆の誘導なども含め、様々な雑用もこなす。

これら選挙で選ばれた委員会以外に、イベント前後の専門的な業務を行うための任命スタッフがいる。これは、OUメンバーの維持や、イベントに招待するゲストとの細かい打ち合わせ、広報活動、マスコミなどへの対応、マイノリティーのメンバーのメンテナンスなど、細々した業務を行う。任命スタッフは公募が行われ、候補者と面接が行われたあと、プレジデントが直接任命する。

2.3 OUと大学

オックスフォード大学とOUの関係は少し複雑である。通常は組合を意味するユニオン (union) という名称のため正しく理解されないこともある。英国の大学における一般的な学生ユニオン (Student Union) は、大学から公的に認められた学生団体の代表の総称である。運営費用の一部は大学の予算から出費される。入学すると、学生は自動的に学生ユニオンのメンバーになる。主な目的は、学習や生活環境の改善や権利の保障などの管理や調整である。また、学生活動に関連する多くの行事も自治的に行っている。さらに学生の立場から、様々な課題を大学当局と交渉することもある。オックスフォード大学にも学生ユニオンとして、Oxford University Student Union (OUST) がある。

一方、OUは大学とは独立しており、学生や大学関係者が別途メンバー費を払って会員となる。中谷 (2020a) で述べているように、OUは学生たちが自ら自由な発言をする場所として創設された。今日でも独立採算の自治組織でディベートを中心とした活動に有志が集うクラブである。

前述のようにOUの活動は多岐に渡り、委員会のメンバーになるとかなり忙しい。このため、大学の教育に従事する立場からは、担当する学生のOUでの委員会活動を必ずしも歓迎するものではない。学生の本分は学業であ

り、専門の科目で優秀な成績を取得することが第一の目標である（行安、1966）。

オックスフォード大学の独特の制度としてカレッジシステムがある。学部生は学部で行われる講義より、カレッジの少人数のチュータリングの方が中心となる。教育の成果として、大学の卒業試験で良い成績をとることが望まれる（Gerald, 1970）。この卒業試験は、1級、2級、3級といった具合に結果が評価され、カレッジごとに所属する学生の成績が発表される。世界中から集まった優秀な学生たちが競争して難度の高い学業に臨むことになる。

このため、各カレッジのチューターにとっては、自分の指導する学生が少しでも良い成績を残すことが優先される。前述のように、OUの委員会のメンバーになると、イベントの準備や運営に忙殺される。また、後で詳しく述べるが、委員会は主に選挙で決まるため、目指すポジションに就くためには相当の選挙活動が必要になる。自分の支持者を増やすには、様々な社交的活動の参加も必須となる。8週間という短い期間で、これらの活動と学業を両立させるのは、それほど容易ではない。Graham（2005）で報告されているように、学業の成績を多少犠牲にしてもOUでの活動に没頭する学生も少なくない。このような理由で、委員会のメンバーとなり積極的にOUで活動することを快く思っていない指導陣の人もいる。

しかし、OUの存在は大学の広報活動にとって大きなインパクトがある。世界的な著名人が、ゲストスピーカーやディベーターとして頻繁に訪れるのは、他大学では実現が困難である。例えば、ノーベル平和賞を受賞したマリア・テレサやダライ・ラマが学生の前で直接スピーチやインタビューに応じる。さらに、学生は質疑応答の時間に直接質問し生の回答が聞ける。実際に、大学はこのような体験をオックスフォードに在籍するメリットとして広報活動に使うことができる。

これまで、OUの大まかな行事と運営組織を概観し、大学との関係も確認した。次章では、このような環境で、運営の中心機関である委員会にどの

ようなメンバーが、何の目的で参加しているのか考察する。また、委員会の構成員は多くが選挙で選ばれる。その過程で、どのような選挙活動を行うのか検証する。委員会で活躍するにはディベート能力が必須である。このため、OUの中心的活動であるディベートに焦点を当て、オックスフォード在籍者がいかなるトレーニングを受け、討議能力を構築するのか考察する。

3 研究手法

ここでは、前章で示した研究課題に対して、どのように取り組み、結果を導いたのか研究手法を述べる。本研究は、主に文化人類学などで取り入れられるエスノグラフィー調査を行った。この手法は、一定の期間に研究者が調査対象の現場に直接参加をして観察を行い、対話やインタビューを行って集めたデータを質的に分析するものである。

3.1 データ収集方法

データとしては、オックスフォード大学やOUに関する刊行物による報告、2019-2020年にOUに在籍したメンバーへのインタビュー、著者が参加した行事やワークショップにおいて録音した資料を活用する。さらに、OUなどが公開しているWEBにおける映像音声をダウンロードしスクリプトに直した。これらの言語データも質的に分析し考察を行う。

3.2 インタビュー手法

前述のように、筆者は2019年4月から2020年3月までオックスフォード大学の Department of Education (DE) に客員研究員として在籍した。同時にOUのメンバーになり、現時点もその資格を保持している。この期間中に聴衆としてOUのほとんどのイベントに参加した。また、3学期に渡り初級のディベート・ワークショップに参加した。これらの過程を通して、多く

のメンバーと知り合いになった。のべ30名の学生と対話を行い、OUに関する事象に関して記録した。これらは、短いもので5分から長いもので30分の対話であった。また、OUのプレジデントを務めた、Sara Dube とは、2020年8月28日に Zoom を使い60分のインタビューを行い、その模様を録音してデータとして活用した。

3.3 イベント及びディベート・ワークショップの録音データ

OUで行われたイベントの多くは YouTube で再生される。調査期間に公開されたものは約100本あった。この音声をダウンロードし、音声データとして活用した。またディベートのワークショップの内容は、ボイスレコーダーを活用して10回分を録音した。

3.4 分析方法

調査対象期間において収集した様々なデータを基に、今回は本論の研究テーマであるコミュニケーション戦略を育てるシステムや、具体的な運営方法に関する事象を抽出した。この際、以下の研究項目に注目した。

- ①OU委員会メンバーと活動
- ②委員会及び要職に就く方法
- ③ディベート・トレーニング

4 結果

4.1 OU委員会のメンバー

OU委員会のメンバーの活動は、前述のように多忙を極める。それでは、どのような学生がこの委員を目指すのであろう。調査の結果、おおよそ次の3つのグループで構成されていることが示唆された。

- ①私立の伝統的パブリックスクール出身者

②競技ディベートのヨーロッパ・世界大会等を目指す者

③入学後にOUのディベートに参加を希望する者

以下にそれぞれ具体的に報告する。

4.1.1 私立の伝統的パブリックスクール出身者

英国は王室を頂点にした階級社会の国である。かつてほど明確ではないが、いまだに上流階級、中流階級、労働者階級が存在する。オックスフォード大学は特権階級の子弟が多く学ぶ所という認識がある。英国には、私立と公立の高校があり、前者は Independent School と呼ばれる。基本的に財政の管理や運営を民間の団体が行う。これらの中でも、歴史が古く全寮制が中心の伝統校はパブリックスクール (Public School) と呼ばれる。

1440年に設立されたイートン・カレッジ (Eton College) などが代表的なものである。全寮制の男子校であり、今でも生徒は燕尾服を着ている。ここはキャメロンやジョンソンなど英国の首相19人を輩出している。年間の学費は34,000ポンドで日本円だと500万円弱である。英国人の年間平均年収が400万円弱なので、その学費の高さは格別である。高額な費用のため、英国で私立の学校に通えるのは全体の7%程度である¹⁾。つまり9割以上は公立の学校に通っていることになる。

しかし、オックスフォード大学の入学者の調査では、2005年の私立学校の出身者は全体の48.8%である。2人に1人は、上流階級や経済的に恵まれた中流階級の出身となっていた。私立学校の場合は、クラスの人数も少なく、労働条件なども良いため優秀な教員も集まりやすい。また、伝統的にオックスフォードやケンブリッジに進学するための準備にも長けているなどの利点がある。結果として、私立学校へ通うことのできる経済的に恵まれた生徒がオックスフォード大学に合格しやすい。このような状況は英国社会の格差問題として、しばしば取り上げられ、キャメロン元首相なども改善を促すように通告した。

このような批判が続く中、機会提供の平等ということを目指して大学も

様々な工夫を行っている。公立の生徒をキャンパスに招いたり、在学生在がそれらの学校を訪問してアドバイスを与えたりしている。また入学試験の面接において公立の生徒が不利にならないように配慮したり、同じ成績ならば優先させたりしている。これらの効果として2016年には、私立学校の出身者は40.8%まで下がった。

それでも、他の大学に比べるとパブリックスクールの出身者が多い状況である。例えば、イートンカレッジの出身者は、伝統的に最も裕福なカレッジの一つであるクライストチャーチ・カレッジに進む者が多い。彼らの中には、支配階級に属して、代々このような特定のルートでオックスフォードで学ぶ者も少なくない。パブリックスクールの教育の特長として、議論やディベートを行い、将来は政界やマスコミ、財界で活躍する人材の育成を目指している。このような学生は先輩や卒業生から、OUのことを伝えられている。このため、入学と同時に自然にOUメンバーとなり、ディベートの技術に磨きをかけることを目標とする。所属するカレッジは異なっても横のつながりは強く、OUの中心人物として共に集団で活躍することも多い。

「英国の首相になるならOUのプレジデントを目指せ」という格言があるように、彼らはOUに入会后、様々なネットワークを使い委員会のメンバーに立候補する。多くはOUで学期中に行われるメイン・ディベートで招待される現職の政治家や、財界人、著名人と討論を行ったり、交流したりすることが目標である。

4.1.2 ディベートのヨーロッパ・世界大会を目指す者

このグループは競技ディベート（Competitive Debate）の参加を主要な目的としている。彼らの多くは Debate Selection Committee（DSC）というOUのディベート委員会の主要メンバーを目指す。

OUのメンバーは、入学前の中学・高校時代にディベート競技に取り組んだ者も多い。彼らは、クラブ活動としてディベートを行い、各地で開催さ

れる競技会に参加してきた経験を持つ。中には英国だけでなく、旧植民地や英語圏で開催される国際大会で活躍した者もいる。彼らはディベートの聖地であるOUにおいて、さらにディベート力をつけるために世界中から集まってくる。

またOUは高校生向けに Oxford Union Schools' Debating Competition を開催している。毎年、250以上の高校の生徒が参加する。これに向けて、ボランティア活動として、各高校を訪問しディベートの普及や指導を行っている。このような体験を通じて、OUのメンバーになることを目指す学生もいる。

OUでは、英国議会の討議形式に沿ったパーラメント・ディベートの大学生競技会へ積極的に参加している。学生競技会は毎週のように英国のいずれかの大学で開催されている。また、ヨーロッパ大会や世界大会もあり、OUのメンバーの中にはヨーロッパ・チャンピオンや世界ランキングの上位に入る者も少なくない。

このような本格的に競技ディベートに取り組むメンバーが中心となり、OUで開催されるディベートのワークショップをリードしてくれる。ワークショップは初級、中級、上級と分かれており、学期中にはほぼ毎週行われる。

4.1.3 入学後にOUのディベートに参加を希望する者

オックスフォード大学に新規で入学する学部生は3800人程度で、多くの学生がOUにも所属する。この中で、上の①、②に該当する学生はそれほど多くはない。難関の試験を合格しカレッジで生活を始めた後、OUの存在や詳しい活動内容を知る者も多い。カレッジの先輩や友人の誘いでOUのイベントに参加を始める。このようにOUの事前知識が少ない者は、ディベート討議者やゲストスピーカーとして招待される、数多くの著名人に驚かされる。木曜日に行われるメイン・ディベートに聴衆として参加すると、その規模や質の高さに圧倒され、感銘を受ける者も少なくない。同じ大学生が、高名な政治家や活動家と堂々とディベートを行う姿を見て、自分もOUで活

躍したいと希望する者も出てくる。彼らは、初級のディベートセッションに参加したり、カレッジの先輩を頼って委員会のメンバーになることを試みたりする。

4.2 委員会の最終目標プレジデント

図1で示したように、OUの活動を行う委員には様々なものがある。しかし、委員会メンバーの最終目標はプレジデントになることである。OUのプレジデントは、とても名誉ある地位である。歴代のプレジデントの中には、ブット元パキスタン首相やジョンソン英国首相など、世界中で活躍する者も多い。

OUの規定によると、その権限は大きく、すべてのイベントやOU運営の最終決定権を持つ。最も注目の高い木曜日のメイン・ディベートでは、中央の台座に座して進行を取り仕切る。伝統的に討議はフォーマルなため、男性はタキシードに蝶ネクタイ、女性はフォーマル・ドレスを着用する。プレジデントは、基本的には10分間の長さである各スピーカーの討論を、場合によっては遮ったり、延長することを認める。また、ディベートの間に設けられている、フロアー・ディベート（Floor Debate）の時間に聴衆の中から討議者を指名する。このディベートは3分ほどの短い時間で、その日のディベートの動議に関して、自由に討論ができる。またこの中で優れた討議者に与えられる賞を決める権限もある。

このメイン・ディベートの前にはプレジデント・ディナーが開催される。当日の討論者とその同伴者が招かれる。まずは、ドリンクが振舞われ、フォーマルディナーとなる。委員会の中から特定のメンバーもディナー参加が許される。このディベートでは、著名な政界や財界人、社会的活動家が討論を行うため、彼らもディナーのゲストである。プレジデントが中心となり、これら著名人をもてなしたり、交流をしたりする。また、ディベート終了後には、ゲストスピーカーの慰労も兼ねてプレジデント・ドリンクが開かれる。この最後の仕上げもプレジデントの重要な役割となる。

他のOUのイベントで重要な、ゲストスピーカーやディスカッションパネルにも著名人が招待される。これまで、チャーチルやサッチャーといった歴代英国の首相だけでなく、クリントン元大統領、マイケル・ジャクソンも招聘されている。

このように、晴れやかな業務を行う課程で、自然に世界の著名人との交流が可能になる。またこの名誉ある地位に就くことは、その人の履歴書にとって輝かしい実績となる。例えば、世界中に広がるオックスフォード大学の強固な卒業生ネットワークの中心にその名が刻まれる。

以上のような権限から、前述のOUメンバーの①に該当するパブリックスクール出身者にとって、プレジデントを目指すのは自然の成り行きとなるであろう。

4.2.1 プレジデントになる素養

オックスフォード大学のDEの教授陣に、英国での学生時代に学んだことで、今に役立っていることをインタビューしたことがある。アカデミックな素養はもちろんだが、成功体験の中で有効なのは、学生時代の社会活動(Social Activity)におけるリーダーの経験という回答が多かった。カレッジにおける学生組織や、クラブ活動、様々な団体(Society)の代表を務めたことである。どのような組織でも代表となれば、高度なコミュニケーション能力が必要である。前述のようにビジョンや戦略の作成、フォロワーの誘導、グループでの実行を鼓舞し、やり遂げる必要がある(中谷, 2010, 2016)。このような体験を重ねることによって、コミュニケーション戦略が身に付く。

以上の観点からすると、OUのプレジデントの任務は高度なリーダーシップが必要とされる重責である。前述のように、そのイベントは大掛かりで、世界的に注目も高い。頻繁な行事を共に運営するスタッフを指導したり、管理したりして成功裏に導かなければならない。さらに各界のリーダーと直接対話や交渉を行うことのできる高度なコミュニケーション戦略が必要

とされる。

しかし、ほとんどのプレジデントがこれらを完遂し8週間にわたる50以上のインパクトのあるイベントを成功させている。調査の中で明らかになったのは、そのような高度なコミュニケーション能力のある学生がこのポジションに自然と選ばれるシステムがある。

4.2.2 変わりつつあるプレジデントの条件

先に述べたような重責を達成できる学生が選ばれるのは、その選考のプロセスに理由がある。OUがかつてのように閉ざされた組織で、パブリックスクールの出身者で内々に運営されていた時代は、裕福な子弟の所属する歴史や伝統のある Balliol, Christ Church などのカレッジの出身者がプレジデントになることが多かった。前述のように、彼らは大学入学前からある程度ネットワークを持つ。入学後も似たような階級の出身者が多く在籍するカレッジでグループを形成しやすかった。このため、選挙において選ばれるのも裕福な階級の白人男子が多かった。

だが、OUは大学からの援助のない独立採算制のため、資金を充足するために、メンバーの増員を積極的に行ってきた。前述のように、重要なディベート訓練に関しても、入学前や入学後に手厚く補助をしている。同時に、大学自体の国際化や女子学生の入学増加に伴い、学生の構成も多様化している。2020年では、女子学生は全体の47.8%で英国籍以外の学生が約40%もいる。またBAEM (Black and Ethnic Minority) とされる非白人の割合は約20%である²⁾。

当然、OUに所属するメンバーも多様化している。委員会もかつてのように、英国における支配者階級の子息の白人男性が中心というイメージは崩れつつある。プレジデントや他の委員会は、OUメンバー全体の直接選挙で選ばれる。結果的に、多くの幅広い参加者の支持を得る必要があり、もはやパブリックスクール出身というだけで選挙に勝つことは容易でない。例えば、2019年のトリニティ学期は女性のプレジデントであり、さらに2020

年のヒラリー学期から続けて3期連続女性がプレジデントに選ばれた。特に2020年度の2人はインド系の女性である。また2020年のヒラリー学期はプレジデントだけでなく主要4ポストが全て女性であった。プレジデントのサラはインド人で、会計系のメラニーは黒人である。また、秘書委員のジュネーバはニュージーランド出身である。

4.2.3 プレジデントの選挙

プレジデントと委員会メンバーの選挙は、翌々の学期の候補者を選ぶ。例えば、2019年4月のトリニティ学期の第7週に行われる選挙は、次の同年10月から始まるミカエルマス学期ではなく、その後の2020年1月から始まるヒラリー学期の選挙である。これは、選ばれた後の学期を準備期間として活用するためである。このヒラリー学期のプレジデントに選ばれたサラは、2019年4月のトリニティで選挙活動を行い、次のミカエルマスは要職から離れ、その後の学期に備えた。

選挙では、図1で示した秘書委員会のメンバーに選出されることから始まる。オックスフォードの独特の言葉にハック(hack)というのがある。これは、どのような団体においても、より高いポジションを目指す上昇志向のある学生を意味する。どの組織でも上に立つためには、自分を売り込み、他人に認めてもらい組織の階段を昇っていく必要がある。特に注目度の高いOUの委員会の場合は、この階段を昇り詰めるのは容易ではない。基本的に主要な委員はOUの会員全体による選挙で決まる。つまり選挙で支持票を得るために、様々な戦略を身に付ける必要がある。

秘書委員会は入学したばかりの1年次の学生が多く立候補する。選挙に立候補するには、OUでのディベートで発言しなくてはならない。

これは、メイン・ディベートの前に行われる緊急ディベート(Emergency Debate)での討議、メイン・ディベートの際のフロアーディベート、そしてメイン・ディベートの後に行われるAfter Debateの機会を利用する。

まだ入りたての学生が選出されるのには秘訣がある。選挙前になるとOU

にはスレート (Slate) という集まりができる。プレジデントの候補を筆頭に選挙活動を行う派閥で、政治色のない政党のようなものである。スレートは選挙が終わると解散される。次の選挙でまた別のスレートができ活動が始まる。このようにスレートは特定の固まったメンバーの組織ではなく、その時に立候補するプレジデントを中心に構成される。

通常プレジデントには2人が立候補することが多く、彼らは共に委員会の仕事をしてくれる仲間に図書委員、会計委員、秘書などに立候補してもらう。彼らが中心となりスレートを作り、自分たちの派閥の支持層の拡大を目指す。このスレートに、常任委員会の候補者も入り票集めをする。さらにスレートは、カレッジの新入生や、ディベートのワークショップに新たに参加した、有望な学生を誘い秘書委員会に立候補してもらう。スレートの立候補者が、それぞれの派閥のメンバーに投票してくれる人を増やす。

例えば友人に「自分はプレジデントに立候補するけど、図書員はこの人、会計員はこの人に投票して」などと頼むのである。選挙活動は、第7週の投票日まで続く。スレートは自分たちの属するカレッジの学生を中心に票固めをする。投票してくれそうな人を捕まえることもハック (hack) するという。選挙が近づくと大学の様々な場所で各スレートはハックを行うのに忙しくなる。

筆者はOUのイベントにほとんど出席し、質疑応答の時間には積極的に質問を行った。またディベートのワークショップにも頻繁に参加した。自然にOUの委員会のメンバーと接する機会が多く、複数のスレートからハックを受けた。場所は多くの場合パブから始まる。顔見知りになると、フェイスブックのアカウントを教えるように頼まれる。メッセージで数度メッセージを交換した後、選挙活動が始まる。特定のポジションに立候補するから投票してほしいと連絡が来る。この際、自分のスレートのメンバーにも言及し、同じようにそのメンバーにも投票してほしいと伝言がある。選挙直前には再確認の連絡があり、さらに当日にはもう選挙に行ったか確認してくる。自分のカレッジの仲間であれば、JCR (Junior Common Room)

という学部生の交流の場で説得できる。だが、それ以外はSNSが簡単で早いで活用する。ただし、当然自分のアカウントも教えることになるので、SNSでハックする相手は慎重に選ばなければならない。OUや他のディベートに頻繁に参加している信頼できる常連を狙うことになる。

各スレートは、定期的に会合を開いて票を読み、次の戦略を練る。スレートの下位である秘書員会のメンバー候補は、票集めができればより信頼してもらえる。

自分のスレートが選挙で勝てば、秘書委員会のメンバーとなりOUのイベントの主催者側になれる。ただ、この段階ではイベントの会場設営や後片づけ、質疑応答の時間での質問者へマイクを持っていくなど末端な仕事に限定される。イベントの立案や運営に積極的に関わるには、常任委員会に選ばなければならない。

常任委員会の立候補からは敷居が高くなる。自分で特定の票を集めなくてはならない。このためにネットワーク作りや、様々な会合などで人脈のメンテナンスをしておく必要もある。この常任委員会になれば、メイン・ディベートや、ゲストスピーチのいくつかの運営を任される。ゲストの選定や折衝、対応を行う。この経験が実績となり、次の選挙の公約であるマニフェストに記載できる。

メイン・ディベートは学期に8回あり、学生は毎回2人から4人ディベートを行う。このため学期で20名ほど学生の枠がある。委員会のメンバーになるとメイン・ディベートに討議者として立つ可能性が高くなる。このディベートで成功すれば、OUのメンバーからも記憶され、選挙に優位になり、後の昇進もしやすくなる。

常任委員として際立った業績や、高度なディベート技術があれば、上位ポストの秘書に立候補しやすくなる。例外もあるが、一般的に秘書に選考された任務を終えた後に、次の学期で図書委員や会計委員に立候補する。どの職に応募するかは本人の希望というより、スレートの戦略で誰がどこに応募するか決まることも多い。

プレジデントの立候補者は、マニフェストにこれまでの実績を記載する。このためOUで主要委員を務めた経験が必須となり、図書委員や、会計委員での実績をアピールすることになる。

多くの場合、その学期の図書委員と会計委員が、翌々のタームのプレジデントを争うことになる。2019年の4月のトリニティでは、図書委員のサラと会計委員のチャーリーがプレジデントに立候補した。サラはインド人女性でカレッジとして歴史の浅いセント・ヒューズの所属である。チャーリーは白人男性で、これまで何人もプレジデントを輩出している名門のブレンノーズ・カレッジに所属している。それぞれ優秀で人望も厚いので優劣がつけにくく接戦が予想された。

4.2.3 プレジデント・ディベート

プレジデント選挙の結果を左右するのは、学期の終盤に行われるメイン・ディベートにおける候補者の一騎打ちである。これはプレジデント・ディベート (Presidential Debate) と呼ばれる。この結果がメンバーの投票に大きな影響を与える。選挙では自分のスレートをうまく活用して票集めをすることは、もちろん重要である。しかし、メンバーが実際の投票場で、他人に勧められた人を選ぶであろうか。特にプレジデントのような重要な職を任せる場合は、直接本人を知っている場合を除いて、自分で見て確かめたいであろう。OUのメンバーは浮動票が多く、彼らは、最後のディベートの出来を見て、どちらの候補者に投票するか決めることになる。

2019年のトリニティ学期のプレジデント・ディベートは、第6週の6月5日(水)のメイン・ディベートで行われた³⁾。この時の動議は、“It is Immoral to be a Billionaire” (大金持ちになるのは道徳的でない)であった。

チャーリーとサラは、それぞれ最初のスピーカーとして、この動議に賛成・反対の立場からディベートを行った。動議の性質上、階級社会の英国で格差が問題になっているため、話しやすいのは賛成の意見であろう。これに反対ということは、大金持ちになることは道徳的に悪いことではない

ということになり、金持ち弁護の要素がある。

メイン・ディベートは競技ディベートとは異なり、エンターテインメントの要素も大きい。どれだけ聴衆を惹きつけ、自分の立場に賛同させるかが重要である。プレジデント・ディベートで候補者を選ぶポイントとしては、クレバーさや討議のうまさ、信頼性、そして何より人物として好感度である。好感度の指標は、スピーチのウィットやユーモアのセンスが大きく影響する (Nihill, 2016)。

特に最初のスピーカーは、ユーモアのセンスが必要である。これは、相手側のスピーカー全員を紹介する役目があり、この際に観衆に面白く人物像を伝えるという伝統がある。

チャーリーは、ディベートのテーマと自分の論点を簡単に話した後、選挙のライバルであるサラについて、ユーモアたっぷりに紹介した。サラはインド人であるが、高校は中東のデュバイで過ごした。また彼女のカレッジはセント・ヒューズ (St. Huges) である。ここはカレッジの中でも最も北に位置しており、オックスフォード裕福な人々が暮らすサマータウンに近い。チャーリーはこのことをもじって、「サラが、大金持ちになるのは道徳的でない、という動議に反対するのは当然かもしれない。なにせ彼女は世界的な大金持ちの住むデュバイで高校生活を過ごしたのだから。オックスフォードに来て、ここで大金持ちが多く住む北オックスフォードに最も近いカレッジを選んでいる。」

この紹介内容は、聴衆だけでなく、そのようにコメントされたサラ自身も笑っていた。その後、反対派のもう一人の学生スピーカーと2人のゲストスピーカーについてユーモアを交えて紹介した。本論である動議について、不平等さについて述べた。予想される反対派の大金持ちの慈善事業の成果についても、しっかりと予防線を張っていた。流暢でウィットもあり、自信に満ちた討論であった。

一方サラは、賛成派のチャーリーと、もう1人の学生スピーカーであるアミーについて、共にOUの委員会メンバーで働いた素晴らしい経験に言及

し、彼らに感謝の言葉を述べることから始めた。自然な発言であると思われるが、チームとしてのまとまりを大切にすることが強調される効果があった。苦戦が予想される動議内容において、道徳的でないということの定義を明確にし、それはお金のあるなしでは決められないという観点から議論した。さらに、チャーリーの不平等さの観点を論破した。これは彼の発言を聞きながら同時に立案した反論であり、サラの聡明さと機転が伝わった。また、全体のロジックの組み立ても明確であり、ディベートとして完成度が高かった。

いずれの候補者も学生とは思えないスピーチであり、さすがにプレジデント候補者同士の見事な討議であった。優劣はつけがたいが、討議の論理性や説得性ではサラの方が優れていたように思われる。

第8週の開票結果では、2020年のトリニティ学期ではサラがプレジデントを務めることになった。プレジデント・ディベートも結果に影響を与えたと考えられる。

以上のようにプレジデントに成るには、委員会の下積みの仕事から始め、カレッジや他の組織で人望を集めて行かなければならない。やがてはスレートを作り選挙活動を成功させるために、単に人柄だけではなく、リーダーシップや交渉力が必要とされる。これらを身に付けた上で、最終的に重要なのはディベートにおけるスピーチ力である。これはOUの成り立ちが学生によるディベート組織であるので当然と言える。このために、OUの代表を目指す学生は、ディベート力の研鑽にも全力を尽くすのである。

5 ディベート力をいかに身に付けるか

前章ではOUのプレジデントになるには、高度なディベート力が必要であることが示唆された。それではオックスフォードの学生は、どのようにして高度なディベート力を習得していくのであろう。ここではOUにおけるディベート・ワークショップと、OUとは異なるディベート組織について考察

を行う。

5.1 OUのディベート・ワークショップ

前述のようにOUのイベントとしてディベート・ワークショップがある。これは、競技ディベートを活動の中心にしているDSC委員会のメンバー2名が交代で後輩の指導を行う。競技ディベートにおける動議に関する賛成・反対のディベートの結果は、討議を聞いたジャッジが判断を行う。

ワークショップに関連して学期の初めにはパブで懇親会もあり、将来ディベーターを目指す学生に相談に乗ってくれる。ワークショップは競技ディベート形式の練習で主に以下の様なものがある。

- ・レベル別ワークショップ
- ・ゲストワークショップ
- ・女性用ワークショップ
- ・ESLワークショップ

定期的に行われるものは学期中のレベル別ワークショップである。これは、学期中の曜日を決めて初級・中級・上級に分かれている。例えば筆者が参加した初級ワークショップは毎週日曜日の夜7時30分から行われた。DSC委員会のメンバーが交代でオーガナイザーを務める。この内容は次のようになる。

- ①オーガナイザーの自己紹介
- ②その日のトピックの説明と動議の提案
- ③ディベート体験
- ④オーガナイザーからのフィードバック

①は簡単な自己紹介でとても短い。英国気質で自慢話はしないが、懇親会などで話を聞くと、本格的なディベート競技に参加している学生たちで、中にはヨーロッパ・チャンピオンや世界大会決勝進出者もいる。

②は、競技ディベートのイントロダクションや、ディベートの役割ごとのポイントを説明する。中谷（2020a）で述べているように、通常のディベートは、その場で発表された動議に賛成派4人、反対派4人の計8人で行われる。賛成、反対の役割はその場で決められ、15分間の準備時間が与えられる。

賛成派、反対派それぞれ Opening の2人と、Closingの2人に分けられる。オープニングは、動議の定義や課題の整理を行い、クロージングはオープニングの議論を引き継ぎながら、主張を立証し相手の議論を論破する。

特に、賛成、反対の最後の役割はウィップ（Whip）と呼ばれ、それまでの議論を要約し、自分側の議論の勝っている点を明確にしてディベートを有利に終了させる。

これを受けてワークショップのテーマは、以下の様な形となる。

第1回 競技ディベートの説明

第2回 オープニングの賛成・反対の最初の討議者の役割

第3回 オープニングの賛成・反対の2番手の討議者の役割

第4回 クロージングの賛成・反対の最初の討議者の役割

第5回 クロージングの賛成・反対の2番手のウィップの役割

第6回 ジャッジの評価を高める方法

このようなディベート・ワークショップに参加する者には、*The Oxford Union Guide To Schools' Debating* というガイドブックが配布される。これは、競技ディベートの手法やルールなどが要約されていて有効である。

ただし、毎回オーガナイザーは変わるし、彼らはガイドブックを使って説明をするわけではない。ディベートの基本はあっても、優秀なディベーターになるには、自分の個性を活かし最適なものを構築している。このため、各自が経験で身に付けた最適な方法を伝授するので、毎回のワークショップの内容に必ずしも一貫性があるわけではない。また、引き継ぎもそれほど行っているわけではないので、各回で個性がある。ある意味、様々な

討議者の戦略や戦術が学べる。

③ワークショップは講義ではなく、ディベートを体験するのが目的である。このため、②が終わると、その日の動議が発表され、ディベートの各役割が与えられる。賛成・反対及び担当箇所は、その場で決められる。同じ役割をしたことがある者は、異なる役割を担当できる。参加人数が8名丁度であれば1室で行うが、多い場合は、2グループに分けられ、片方は別の部屋に移動する。自信のない学生や初めての者は、オーガナイザーと共にジャッジの役割をする。

15分の準備時間が与えられた後、それぞれ5分間で自分の役割順に討議を行う。相手側が討議中に、質問や意見を言うことができる。これはPoint of Information (POI) と呼ばれ、質問や論点の矛盾を指摘できる。ただし、POIを受け付けるかどうかはスピーカーの判断による。あまり受け入れると自分持ち時間が少なくなり、十分な議論ができない。しかし、全く無視をすると逆に自信がないとみなされる。

私は3学期とも初級のワークショップに参加していた。だが、時には経験豊富な学生もこのワークショップに参加する。彼らは英国的に控えめ(reserved)なのかもしれない。高校の時に競技ディベートをしていた者や、秘書委員会のメンバーでOUのメイン・ディベートを経験済みの学生もいた。

④は、参加者のディベートが終わった後、オーガナイザーがフィードバックをしてくれる。まず全体の感想から始まり、それぞれ個人の討議に詳しいコメントをくれる。学生同士ということもあるので、慎重に言葉を選び、できるだけ肯定的に改善点を伝えてくれる。彼ら自身が経験豊富な一流のスピーカーなので、フィードバックは内容が濃く、適切でとても参考になる。

ゲストワークショップとは、学期に1回ほど外部の講師が招かれ、直接手ほどきをしてくれる。彼らのはかつての世界チャンピオンなどで、現在も様々な所でディベートを指導している専門家である。レベル別ワークショ

ップと同様に、その場で動議が与えられディベートを行う。特に印象に残っているのは、メモなどを見ずに自分の言葉で聴衆に話しかけることの重要性である。

女性用ワークショップも学期に1回開かれる。かつてOUは男性中心だったため、女性のディベート参加を促進する目的で始まったのかもしれない。現在のOU委員会のメンバーで物怖じする女性は稀である。しかし、まだ世界では女性が自由に発言することを制限されている国もある。これらの国出身の学生にとっては、男性の前でどのようにスピーチを行えばよいのかヒントを得る機会となるのだろう。

ESL (English as a second language) のワークショップは、英語を母国語としない学生が、ディベートを開始するための手助けを行うものである。これも学期に1回程度である。私が参加した時は、韓国出身で高校時代に世界大会に出場した経験のある学生がオーガナイザーをしてくれた。英語が母語でない者の問題点は話すスピードで、制限時間に盛り込む論点が限られてくることである。この際、例えばESL討議者で3つの観点で議論することができなければ、2つの観点到り絞りと討議をすることが有効である。

以上のように、OUでは適切で有効なディベートのトレーニングを積む機会が豊富に用意されている。

5.2 その他のディベート組織

OU以外にも、オックスフォード大学には様々なディベートを行っている組織があり、それぞれメンバーになれば参加できる。代表的なものを報告する。

5.2.1 The Oxford University Conservative Association (OUCA)

これはオックスフォード大学において英国保守党を支持する学生の団体である。1924年に設立された組織で、英国の保守派としての政治活動を学

生の立場から支援する目的で設立された。今も保守党に所属するOB議員をゲストスピーカーに招いたり、選挙活動を行ったりする。このOUCAからキャメロンやジョンソンなどの首相も輩出されている。

しかし、この団体に入会するのは保守党の支持者だけではない。OUの主要なメンバーもここに属しているものが多い。その理由は、市内中心部のセントジャイルズ教会のホールで、学期中の毎週日曜日の午後8時30分からP&P (Port and Politics) というディベートが行われるからである。このディベートはユニークでポートワインを飲みながら政治などに関する討議を行う。入場料は10ポンドでポートワインやソフトドリンクが無くなるまで飲み放題である。OUCAの年会費は10ポンドで、もし会員になればP&Pの入場料は毎回5ポンドになる。しかも初回は、この5ポンドも無料になる。

お酒をたくさん飲む者には朗報であり、学生たちの興味深い討議も聞ける。たいていの学生は政治論議よりも、様々なカレッジの学生が集まる社交の場として利用している。伝統を守り正装で議論をする学生もいるが、OUのディベートと違うのは、スピーカーも聴衆も多くがかなり酔っている点である。

毎週直前に2つの動議が発表され、その場で新たな動議が加えられることが多い。1人のスピーチの長さは制限され最長2分程度である。例えば動議は以下の様な漠然としたものだ。

“This house feels sorry for America.”

“This house would reshuffle.”

このような動議だと内容の自由な解釈が可能であり、話者のウィットでいかにでも賛成・反対の討議ができる。チェアがいて、賛成・反対の観点から交互に聴衆の中で手を挙げた者を指名する。ポイントは、聴衆の多くは酔って大声で話しているなので、彼らが聞くようなスピーチをしなくてはならない。大きな声を出すだけでなく、観衆を惹きつける技術が必要だ。

聴衆は面白い討議を期待しているので、発話内容はウィットの効いたものや、ユーモアがあるものでないと聞いてくれない。あまりまじめな話をするとすぐにブーイングが起こる。討議者の指名はチェアに一任されているので、つまらないスピーチをする者は指名してくれない。このため、発話力のある常連が議場の前列に詰めており、手を挙げて交代で発話する。

筆者はメンバーになるとすぐに発話をするように心掛けた。最初はなかなか指名してもらえなかったが、たまたま発話者が途切れた時に手を挙げて機会が回ってきた。運よく会場の笑いを誘い、それ以来、指名されるのが容易になった。1つの動議で必ず1回は発話するように努めた。

このP&Pのディベートは、競技ディベートを専門とする学生にはあまり好まれない。ここでは、議論の論理性や妥当性よりも、いかに場を盛り上げるかを皆が目指している。極端な話、暴論であっても場の雰囲気をつくり出し、ウィットに富んだことを大声で話せばよいのである。中には賛成の話をした後すぐに、自分の議論の反対討議を始める者もいる。

選挙が近くなると、OU委員会の学生の参加も目立ち始める。彼らの目的の一つは自分の属するスレートのためにハックすることである。特に、保守派支持者にはパブリックスクール出身の者も多く、彼らを味方に付ければ、スレートは強力になる。ただし、この場であからさまにハックするのは嫌がられる。多くの学生は純粹に面白いディベートと社交を楽しむたいのである。

P&Pが午後10時半位に終わると、多くの学生はそのままブロードストリートにあるパブのキングズ・アームズ (King's Arms) に向かう。ここで飲み直しをしながら、さらに交流を深めていく。OUCAのディベートはOUとは異なり、社交術や声の出し方、ユーモアのセンスを磨くのに役立つ。

5.2.2 その他の代表的ディベート組織

保守党の支持者がいれば、労働党を支持する学生も当然いる。オックスフォード大学の Oxford University Labour Club (OULC) という労働党支持

団体がある。これは学期中ほぼ毎週月曜日にディベートを行っている。

また、英国自由民主党の支持団体 Oxford University Liberal Democrats (OULD) もあり、こちらは水曜日にもディベートを実施している。

これらの団体の母体は政党を支持するものであるが、ディベートの参加資格として特に政治活動を求められるわけではない。ディベート力を高めたい学生の中には、時間許せばOUCA, OULC, OULDの全てに参加する者もいる。

これ以外にも、Oxford International Debating Society という国際関係についてディベートする組織があり、主に水曜日に開催されている。

そして前述のようにOUのメイン・ディベートは木曜日である。オックスフォード大学ではこのように、日曜から木曜日までどこかでディベートが開かれ、活発な討議を行っている。希望する学生は、討議の技術を高めたり見聞を広めたりするために、気軽にディベートに参加できるシステムがある。

6. まとめ

以上、本論はエスノグラフィーの手法に基づき、筆者が体験したり収集したりしたデータを基に、オックスフォード大学のディベートを中心に考察を行った。特に、これまで日本ではそれほど報告されていない、ディベート組織として世界的に有名なOUの活動に注目した。この団体で、学生たちがどのように組織の階段を上っていくのか確認した。この過程では、リーダーシップに必要なコミュニケーション戦略を身に付けることが必須である。この裏付けとして、2020年のヒラリー学期のプレジデントにインタビューを行った際のデータも資料として活用した。また、OUで成功するための根本のスキルとなるディベート力をいかに発達させていくのか、ディベート・ワークショップの内容を検証した。同時に、OU以外の団体のディベートの状況の報告も行った。

これらのことから明らかになったのは、自由な議論を尊重することが民主主義の基本という原則に立ち、その中でリーダーとなるべく、ディベート力を伸ばす豊富な機会が用意されていることである。つまり、大学がリーダーシップを教えるのではなく、オックスフォード大学という組織の内外で最良の学ぶ機会が豊富に構築されており、それを伝統として維持し続けている。これが、数多くの国際的なリーダーを輩出し続けている理由と考えられる（田中，2014；渡部，2009）。以上のようなことが、オックスフォード大学が2017年から続けて世界ランキングの1位に選ばれる理由の一つの説明となるであろう。

今回の研究はエスノグラフィーという手法の制約から探索的なものである。研究者が収集した資料やデータ、及び直接の経験を基に主な報告を行っている。このため、結果に客観性を持たせるためには、今後より多くのデータや複数の研究者の追加検証が必要となるであろう。しかしながら、これまであまり日本で確認されていない、OU活動の報告を通して日本の大学教育の在り方に示唆を与える可能性がある。グローバルな社会で活躍する人材が育つためには、確固たるコミュニケーション戦略が身に付くための学ぶ場を、大学や社会が率先して新しい世代に提供することが望まれる。

注

- 1) Sean Coughlan. “Oxbridge over-recruits from eight schools”
BBC News education and family correspondent, 7 December 2018
- 2) University of Oxford Student Statisticsを参照
https://public.tableau.com/views/UniversityofOxford-StudentStatistics/AtaGlance?:embed=y&:display_count=yes&:showVizHome=no
- 3) 通常は木曜日に行われるのが水曜日になったのは、英国のEU離脱の手続きが混迷しており、この問題を討議するパネルが6月6日に行われたからである。このパネルには自由党や保守党の議員が参加するため、彼らの日程と調整する必要もあったと思われる。

参考文献

- Brock, M.G., and Curthoys, M.C. (1997) *The History of the University of Oxford vol VII, Nineteenth Century Oxford, Part 1*. Oxford: Clarendon Press.
- Catto J. I., Aston, T. H., and Evans, R. (1984) *The History of the University of Oxford Volume I: The Early Oxford Schools*. Oxford: OUP.
- Ceadel, M. (1979) The 'King and Country' debate, 1933: Student politics, pacifism and the dictators. *The Historical Journal*, 22:2, 397-422.
- 船守美穂 (2009) 「世界の有力大学の国際化の動向 (5) オックスブリッジ米国の有力大学と競争する英語圏の大学」『大学・短期大学・専修学校のためのリクルートカレッジマネジメント』27-1, 50-53.
- Gerald, C. (1970) Old mortality at Oxford: Monsman. *Studies in Philology*, 67-3, 359-389.
- Graham, F. (2005) *Playing at Politics*. Edinburgh: Dunedin Academic Press.
- 行安茂 (1966) 「オックスフォード大学の伝統とT.H.グリーン: ベリオル・カレッジを中心として」『岡山理科大学紀要』2, 111-121.
- ジョイス, コリン (2018) 『なぜオックスフォードが世界一の大学なのか』三賢社.
- 金井壽宏・野田智義 (2007) 『リーダーシップの旅: 見えないものを見る』光文社.
- 荻谷剛彦・吉見俊哉 (2020) 『大学はもう死んでいる? トップユニバーシティーからの問題提起』集英社新書.
- 荻谷剛彦 (2017) 『オックスフォードからの警鐘: グローバル化時代の大学論』中公新書ラクレ.
- Kotter J. P. (1999) *What Leaders Really Do*. Harvard Business Review Press.
- Nakatani, Y. (2015) Effective oral presentations by business people in TED: Implications for developing CEFR can-do lists. *International Journal of Conceptions on Management and Social Sciences*, 3-4, 81-83.
- Nakatani, Y. (2016) Exploring business communication strategies based on CEFR. *International Journal of Language, Literature and Linguistics*, 2-3, 86-89.
- Nakatani, Y. (2017) The applicability of emotional intelligence through CEFR towards enhancing cooperative teaching and self-learning in Japan. *WWA Journal*, 6, 18-30.
- 中谷安男 (2004) 「オックスフォード大学におけるコミュニケーション活動」『比較文化研究』65, 69 - 78.

- 中谷安男 (2010) 「国際ビジネス英語到達目標に関するインタビュー調査
CEFR-Jの質的検証への考察」『東京理科大学紀要（教養篇）』, 42, 91-109.
- 中谷安男 (2016) 「CEFRの上位者のビジネスコミュニケーション・ストラテジ
ーの検証：英語活用社員の調査」『国際ビジネスコミュニケーション学会年
報』 75, 13-31.
- 中谷安男 (2020a) 「オックスフォード大学におけるリーダーシップの学び方」
『経済志林』 88-1/2 (In printing).
- Nihill, D. (2016) *Do You Talk Funny?: 7 Comedy Habits to Become a Better (and
Funnier) Public Speaker*. BenBella Books.
- Russell M, and Wyland, R. M. (2001) The Attic society's "Oxford Review":
idealism, failure, and early nineteenth-century periodical culture at the
University of Oxford. *Victorian Periodicals Review*, 34:2, 128-146.
- 田中正弘 (2014) 「オックスフォード大学の学年末考査に関する事例研究：何が
問われ、どのように採点されているのか」『大学論集』 45, 143-158.
- 橘 宏樹 (2018) 『現役官僚の滞英日記』 PLANETS.
- 渡部亮 (2009) 「ケンブリッジ大学と英国の教育制度」『経済志林』 77- 2, 325-
339.
- Walter, D. (1984) *The Oxford Union: Playground of Power*. London: Macdonald.

付表 Oxford Union Term Cardより一部抜粋

Trinity 2020							
	Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
0th Week 19th to 26th April	19	20	21	22	23	24	25
1st Week 26th to 3rd May	26	27 ● Winnie Byanyima	28 🗳️ Hong Kong Debate	29 ● Katya Adler ● Miriam Haley	30 🗳️ Putin Debate	1 ● Prue Leith	2 ● George Foreman
2nd Week 3rd to 10th May	3 🗳️ Weekend Special: The Chef's Roundtable	4 ● Brian O'Driscoll	5 🗳️ COVID-19 Series: I	6 ● Sir Clive Woodward ● Ángel Gurría	7 🗳️ Prison Reform Debate	8 ● Gina Miller	9 ● Joanna Lumley
3rd Week 10th to 17th May	10	11 ● Marc Randolph	12 🗳️ Afghanistan Debate, Part I	13 ● Dr Soumya Swaminathan ● Daniel Sturridge	14 🗳️ Afghanistan Debate, Part II	15 ● Joshua Wong	16 ● Senator Ted Cruz
4th Week 17th to 24th May	17 🗳️ Weekend Special: Book Club	18 ● Governor Jeb Bush	19 🗳️ COVID-19 Series: II	20 ● Mike Schur ● Judith Heumann	21 🗳️ Rohingya Debate	22 ● Rainn Wilson	23 ● Phil Neville
5th Week 24th to 31st May	24	25 ● President Kersti Kaljulaid	26 🗳️ Latin America Debate	27 ● John Delaney ● Dame Jane Goodall	28 🗳️ Democratic Party Debate	29 ● Alistair & Jonathan Brownlee	30 ● David Lamy MP
6th Week 31st to 7th June	31 Weekend Special: Demystifying Mindfulness	1 ● Sean Rad	2 🗳️ COVID-19 Series: III	3 ● President Egils Levits ● Bonnie Wright	4 🗳️ Love Island Debate	5 ● Steve Aoki	6 ● Missy Franklin

Ethnographic Research on the Oxford Union and Other Debating Societies: How the University Can Develop and Enhance Future Leaders.

Yasuo NAKATANI

《Abstract》

This paper explores how the Oxford Union and other debating societies can help students become future leaders. In order to utilize ethnographic approaches, the author belonged to the target communities at the University of Oxford, in which the learners make tremendous efforts to improve their debating skills. The data were collected by means of interviews and recordings during debate workshops sessions, and then analyzed qualitatively. The results indicate that students were able to gain enormous learning opportunities for communication strategies that aid the development of leadership skills through participation in outstanding debate events and meaningful workshops.

